

河
平
河

利9
3869
64



特
日利門
號 3869
卷 64

大正八年四月十日
室井三郎

俳諧平河屋

合歡堂下石言机子立竹のハ
岸の蟹目之末以少く之月燈七
かろりさきとて二十四年乃春秋と
るこ思甚同好く之耕業を遊

乃親よは播めりる判れり
耳のひあるは伝也さるる
ふつたて終る山舟とあはる
と唯九牛の毛とてさる
道も終るは多むれあま
れの字もあはるいあま

そえ米あるし幸よ極本に
のわいひあはるはあま
ちん事とていふとあま
りる事とていふとあま
しる事とていふとあま
りる事とていふとあま

鳴山亭のくわ酒の火籠
あつたはくを理を告
きんをきききききき
きききききききき

雨亭
映秋

占意

朱木道玄



凡例

一 二千字の句十五点
松林の河十五点十五点
もまきききききき
のききききききき
松十五点十五点十五点
分付

一 前々此記才後記ありし
事 蟹々如し世の小冊子
習くおと成渡し一待り

三



合歡堂不言高点

十五点十八点
廿点廿二点 混雜

包 此の物あり多も京土産
産 赤くは揚屋に北境の
石塔へまへ 娘の吹
産 孫の因に宿願を遂げ
心とつとをぬ 母の仲人

鼻の修に、目川伶人
子以字を下りたを字の修大工
違ひ子の位を修り、その花
と向き、か影、まことんをぬね
山出の壳、あまに、あまに
大津修子画の、あまに、あまに
近月、あまに、あまに、あまに
あまに、あまに、あまに、あまに

母へ、あまに、あまに、あまに
菊の、あまに、あまに、あまに
運の、あまに、あまに、あまに
難を、あまに、あまに、あまに
あまに、あまに、あまに、あまに
あまに、あまに、あまに、あまに
あまに、あまに、あまに、あまに
あまに、あまに、あまに、あまに

我離と刀自ハ折佛子たる折り
しし九子ら射る福と詠列る
や川と流るるんやる袴とん
風の裾とる敷女子とる
新禮の折子たるか
音 着子姫の扇る室引
心とる折るんけいせん
海木の意折る海釣安とる

伊國一日伊折子居
毛丸打を尻飛出す
遠少子も松波むし五人の日
神津具貞の女ん
志子乃るは折子新禮
靴を流るんや折る盲子
折るゆまの蒼眼とる
毛丸の意と折る鬼灯

三コ

満るも枇杷の事さぬ花
法世の悔し日をり番返
女さうゆりばをくくし急
終きしゆきと候西清海
雨の候やぬ身かぬ
むかむ理まてある合乞
名僧より女子のそん怖き
きん法華の寺を宴

ハハ

モムイ

二二

操の奥は法の親王
齋よりなる寺人縁組
情ふい男は六ヶ路の心
互之層の程るまは動す
魚くおてさん投は依寺の着
雪の夜よめく思ひまを
操陰行るむ家たこりおえ
責ははゆめを姫と世りか

オシエ

目のもんはほくまのん大寺
 初秋の目よ冷中りと脚川
 人形ももよ丸 三 人
 園遊つく見れど構も舞の雲
 矢跡るうく女御是る世と成ぬ
 盗人御持て振て可る所の居
 碑の沼よ首ぬ人も用い
 盃えれどじきき廊の御血

コトハ
 ヒメツ

コトハ
 コハ
 クカヒ
 子は怪毒よかり後怒りもく
 非常に大敵語はかたし
 胃壳のお縁着くは縁
 言物おいはゆる流より世用い
 岩れ家の残葉も雪の一時
 明道く獲て雪のよとぬらぬ
 七堂上御監日向すくは
 後一持持の氷抱おしぬる

夕粒

トムカ

十叶

乳の甘き下底の小刀
板より梶がくもくの間
鳴りては帆たつ子待た後
回極志はくく使なきはる
船籠りて中の命も紙一重
素の人の日和同くす
遣り流しを伴は舞うり
樽出くく隠す女の身へ抱

女の泣の別よ川迄者
居纏る存の外は白髪も
御叔は川より親里へ書
神楽の舞する衣袴の舞
菊印くすまの茶田の
迂くくを帆をきん京
追利子切られて地をけや
貞女を古も編を一

キリ

きこふくちくく光輝のち
能くんれしる字のまはさう状
重盛のかうけりきもくをせり
園のおむしり洲よ 雲の雪
千々ぬ摩平を帰路と記す
魂ちうう門回も薄さ入らぬ
雲の氷と湯がす月夜に
美士よ出縁の戸をぬく

セリカ

ヌリ

京の雪も心のまじりに
城のしんを様も来てんてら
子ゆくの園に踊 たのしみ
紙の裁きもきまり たのしみ
森の夜道のやうに たのしみ
乞食の子も たのしみ
後合せて たのしみ
新穀のなま たのしみ

コリヨ

ニキリ

こ子の様も 眠付すし
和尓のぬきと 襦もきぬ寺
母のまはらうく 娘のたあうく
き母習子子神 佛のまつこころ
心合ふともねしき 伊塔の成徳と誓
光陰とんてん 筆はゆきまはるく
子の日くく 宿女の指のまゝく
天 紙楯のくく 蘭 夫

大船のきりし 流し波列きく
他人の美く ありたきく
幸はの 野 程 けりらん
二度 階ふ 髪を 赤の 巻
はよ 油の まる たきれ 胃
森 起ほ やり みる 子の 巻
り 燈 汚す 赤の けり
あちと みる 事 像 刻む

イキ

世の春や小船よ女の舞の
伊路のさき清き心は
田山あえ松女はれを
本位のをあ人毎く
旭きくさく伊路へ
及ふー包清き
うき時の船よ
情なきはれ
の付く
娘

ウハ子

世れくは揚屋も春は
儀妻も二ふ
物まも私
引船の儀
櫓子
漸く
着合
一ツ家の

せりりと音のる家の庭に子
涉塔より日頃を暮らす病鳥
ワサワサを構ふ去来の互ひの
日のうらやまの店 千人
燭臺をとりしる籠を夜の花
坊のあふふ家合社の夜のぬく
柏屋の舟の船をくたそらり
赤中より子も行く法の序

毛丸めをく油と嘘たる
涼も呼れさ亭へ雪もあらく
柏屋をく思ふ日をさ
都人の二日傍り
飛たる船も京色の山岸の寺
揚屋より大庭様をく
その庭をく鬼の子外
女もよめをく男へ

とつこ
とつこ

桜浮く田の畦を萩入
茅は刈りまのふきあひの
捕去せんし程多をかたらふ
狐のうしろれ程多あひかり
夏の間に穂の穂を抱けて
舟を力かせし程の金くらけく
なまよ申かめし程の料の魔
前とん川で萩入の飛子ひそ

あめくろく色さのほのよき
大萩の穂ふり命こちり
波はけし程多あひかり
人ほのほの家の上を思ひし程
大つて運入今程の秋の色
廣き蓋し著習する程多
竹垣人懐の程多あひかり
さくさく西のちみも東山

ヨイ
アハカ

雪の日はハ板すゝ氷と音煙草
破塵弓貫ふ後梅舎の秋
つ松い先之柳の素あふ心
ふる麻も之を歌く川を
当字あふも百粒の智恵
喰撫子庄屋のまを何あかす
や〜糸〜も流る 妙老
梅系一這入あくら北嶺の西

馬てききしは和回り善程
踊る夜、之をいもぬ意
目黒を怖るる言も思、代
神秋の灯もいらく、京御工
す〜糸〜も流る 金々のそま
牙尊の西す流る 茨木
家方の母、半も新る、春
た〜け〜もい〜川〜曲〜と伝

ウチ

ういむく 教はまゐいも敬

イモウ

寺の屋色ぬき込多ぬ斗之
咲花も付の者も馬に駕

アチハ

口歩びしそかろわきく舟松
合傘におりしひらき流し船

ヨメ

春糸の回の三重と彩をく

イモ

小糸女の裁くひあきうしく次
ほくさの茶廊の讀みあうと

アウカ

旭影海一面うし光明寺

情し氣かくはなをる遠く已藏

清きりの流もや川さう清あま

大寺うりおをまよるきて言敷

翹り白木の臺を携ひん

志をくし岡山堂のうをくき

たしや神の吼る鐘聲

雨をくしそ麓に火の煙

チホ

キハ
ハシキ

ヒ十ト

ハ七ヨ

子五

急目らむとてさうに市陽に
去るも志ありさきのけし難き事
あひすとも教氏の后に傾く
元も事の何となくあつてさうし
掃をけり人けりる事家の存し
慌忙の家出を命に中しはり
瞬々ぬさうとて福なる新被
此達由賢女なる名の時子とて

一三ハ

つヨ

し由ハ

志のつとて天に隠す是の音
を習ひ永き日抑も子とてはく
又そのあまよき壽く終一巻
傳り此入りさうとて送るはく
つより音よ宛 ありき 勝
本想の程、構も帆もせに
とやかく押めよの蓮の門
都る雪よあまをば用とて

おんこゝろ法同の法
たふれよ面ひそ妹うり
火貫の映く人よ実尚且
獲生り危の院へは向く
渡屋よのうゝ境を以て
難流氷と替ふも志ぬを
のうろく車よ脂りのる
はれよのにさる人の春柳

お着りおてゝもまよひける 母
たぐさきの産中産るもの山
あや久遠母の休むるも業獨
かゝるゝありあや光のまよへ
お離よ女の多しあやうりそ
馬もあかく 軒字えん中
夜もねよあや果のかび
男もてりれ産人替 替

ハナ

みよの好も母ハ唐船とてりて
九重の雪はらん寝るも山連の師
園より竹りはるる一々を
大らる燭も美人ハ照 續
所の母も事も負はるる悦事
ぬけそりみり付まると神
人の字も春りつる京のち
帰路もとてき思替も制りて

ナヒ

ヨ

名代の要害もあもるあり
夜まを永くねりて又月白
悪病もとて女も通す病も
美人も遣りて流るるとおも
あつらると笑ふ踊の早し
四角も人の眠り元日
又おのおもくもあつら
おもはるるお春めき

ナ

テモド

連う佛師を具せしめる京
像をたむよ物る入唐
唄さうんくくま岩 汲
ゆまのちの人のあましく
夏衣袖持ち老も面か
寺く一都近しの歌をみ
くくく陸任のあふ馬生会
更れくはくくと悔む懐石

雪の相作り柳河上よりそ
ゆふすくくくく住へる幸薬
若林居ゆきの流のたれ
俄る枕海ハ女うたうらり
至見んけしくも母のくもれ
紙て折る人子ばたよ 痛
款迎刻し木も腕はよゆ
如る回存うそん物のくもせき夜

母の手を解く凱陣のやれ
即ちうすは棒まのく神々し
合も同じくことを強繙也
和勝の陣は僧の正心
むいそく関の入り口
宗任んんとお手あふり
成り物川或寺の眼の下
きと宗の古馬の向う山様

二二

二度の泪は流す河の向
またれを流す河の流るの上
子河を流す河の流るの上
崎にまた河の流るの上
まはりの命の元悟んる
兼好の流るを流す河の流る
蘇約も流るはとのまの
さしやうと持香向の指さす

ト二

松竹の川と乾坤のふら
大徳のまのつらある人
世の元と位牌のた
切手す川女一舞うしら向
静りの京も静をい静をさ
あの子の何れは静のた
禪のまれと無垢のま
あまのまの静のた

尚書を案極の松さうり
まやうとある松の吹
何れは静のまの静のた
写し切しぬ雪の松
流るる松のまの静のた
字の夜の松のまの静のた
心やうと不の静のまの静のた
松のまの静のまの静のた

呵れれけりし言傳又言傳
未しこころあき女商人
習ふ通り娘の口上
来也と又めてふと尚書會
志川之能き痛まらぬ花の香
童尸と大蛇の心腹り知し
笈傳も休も解も未しあつ
灸火は居し一ツ足らぬ

風流の赤白留きせりほくきん
いゝもあつ流の藤の葉の
居伝はも能れぬあし言る
此跡も澄ぬり君の春
春曙抄吟うり虫と増きお
徳富此巻れ中子撰集
自れぬきしふる良の陽收
解胃のふぬら安伝の仲鷹

何を云ひまゝに事を推して
増も松古も雨も此の川家
皆香の餅もくち人房の人
二十四 盛や危のれ 藤
佛のや人の川に此菊 作
一夜の松子の美深とあり
秋来ると眼も此の度 下
あゝりなれば何れも

氷室の松威園はあり、物
あつたをいへしを位牌あり
娘、孝母のまゝ入道あり
夫人のいへるは、人質
福我の竹篋からよき難法
ま難子も解きをはり
清也といふ母の母の
他、遠流大船もはる

イア寸

環さくろと備旨いそく
母程成及程子娘の者あり
占う南さくし雲衣成ゆり垂し
きふも言あハ拙抄と記すに
かし出方る前日津屋をふるも
小松殿うとと出代りもか
玉心比まきく浮世は拙抄を
新撰のあふれしと別れ

七十

遠い智か子一馬の力
美人成アムま夏の夕々水
は下伏九つ々始ハツ々
守ふよるさくゆりく道 桜

ホノフ

七念ま了部の神の女うそ
堪忍の成さけ竹の雪おろく
いんさんおらとれしる執身
燭の灯のねりた御舞の神

しすて

二二二

怖く下女の居守 重浩
都の梅さきくろく
起てのまの教を状着く
中子の付けしおれは新ふ女工
新被のこそう揃く子切切
梓さうけを見まきさ
元日の目より三子福者
報りし子たは家内

二二二

合款堂の高矣沢地一自白
わが心ゆりしすまいさう
老尾子まらあ
大象はかく京乃也相
呵れは老母まてかろ
子乃年紀と家内見送候

末道

イアチ
オカフ

お子の花は眼はちりり
遠言よりあふ舞の習ふと
境海雪は好りと海とく
百里隔く病も子實
妻の内も子あねむこれ多め
行はるを病むは多病田
大きの公事とあふよあ入
教り出る戸とあふ丸つ

イコキ

唐の美人よよん運り
そふりし事も女の家の
沖雲の光と正海あらし
地こゝ唐の落の一
新艘子よ何と京
雪ははらんそふり
や道年比女も
素直の帯比世も

クク
イフ

メヨ

後とづい河のも子心き神
先づうに年の高きぬ 領城
家内ききおひおらす 鹿 鹿
茶の花ははき 鹿 鹿
啞一叫い 鹿 鹿
秋風は家子きき 鹿 鹿
名死揚屋一日む先さくら
大河せりーと水産殿の船

ナカ

キアム

カタテ

うん

願豪子佛たのく 子心有る
は忘れ種と 鹿 鹿
喜の母も 鹿 鹿
獅子の 鹿 鹿
海運上の 鹿 鹿
子の高砂子 鹿 鹿
う子今子 鹿 鹿
儀の 鹿 鹿

河
近刻 後編

天明六丙午年九月

江都東廠山下

花屋久次郎板

誹風柳多留

刊 補助 櫻木庵

源氏活花手引草

千葉龍卜先生活方記又
松茂齋五凌著 出來

和漢軍談記略考

諸軍談藏曆類自委々記又
并二名教書名奇入 出來

誹諧鱗

江戸宗匠和生ニ至マテ高莫ノ今集ノ類書ニ
聞得ム道具ヲ委々記又
英ニ先師ノ系譜ヲ在シ其居所ヲ具ニ記又
美著者散人雪成著 出來

稿

東廠山下竹町

星運堂梓

花屋久次郎

